波多瀬なる樹齢確かな山桜

（1903）明治36年、波多瀬小学校新築移転の際、生徒が山にあった山桜の幼木を植えた。町指定の天然記念物。

波多瀬の保育所跡にある山桜の大きな木は町指定の天然記念物になっています。

日本が近代国家に生まれ変わる第一歩の、明治時代。国民すべてが教育を受けられるようになりました。

勢和村になる前の五ケ谷村と丹生村の時代よりも前の、さらに小さな村に分かれていた明治の初めはお寺などを利用してそれぞれの小学校がつくられました。

波多瀬村の小学校は最初、観音寺におかれ、その後、明治36年（一九〇三）、小学校が新築された場所が、今、ゲートボール場や、ゆめ工房があるあたりでした。

ここに新しい小学校が出来たことを記念して、子供たちが山に生えていた3年目ぐらいの山桜の苗を移し植えたのです。

山桜は山にひとり生えした木がほとんどですから、樹齢（木の年齢）など知りようがありませんが、この木は一、二年の誤差はあっても樹齢がわかる珍しい山桜と言えるでしょう。

今年（二〇一七年）、一一五、六歳の山桜。最近、少し弱ってきたうえに、今年三重県に大きな被害をもたらした台風21号で危機的な状況にあります。元気になってほしいですね。

氷室あり 冬の氷を 夏食べた

相可には氷室という小字がある。昔、冬の氷を奥深い谷に穴を掘り保存した場所だと言われている。夏になると都や斎宮へ献上された。

多気町は字という区域に分かれています。例えば相可や荒蒔、丹生、朝柄などです。これがさらに小字という小さな区域に分かれています。

小字名にはどういう意味があるのかわからないものもたくさんありますが、そこがどんな場所だったか教えてくれる地名があります。相可にある氷室という小字もその一つです。

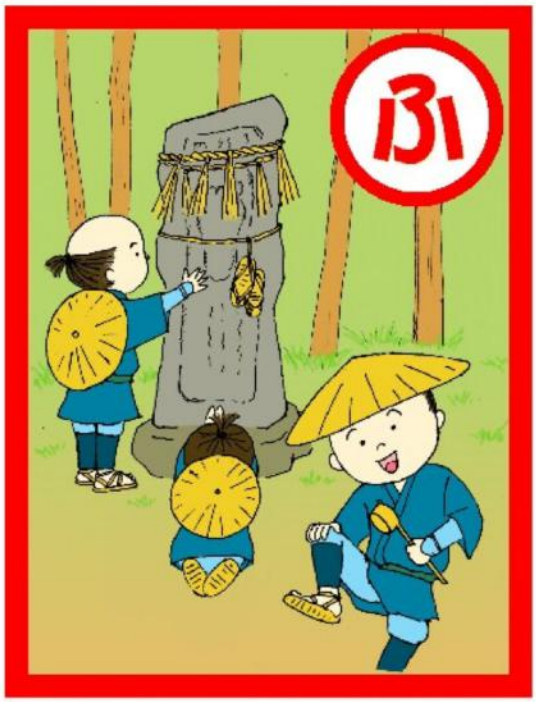
今は真夏でも自分の家の冷蔵庫で氷を作れるし、アイスクリームやアイスキャンディーを買って食べることができます。でも昔はどんな偉い人やお金持ちでも夏に冷たい氷やお菓子を食べることはできませんでした。

それを何とかしようと、夏でも涼しい奥深い谷などに穴を掘り、冬の氷を草やワラで何重にも包んで保存したのです。

夏になるとすでに小さくなっていますが、残った氷を馬や牛に乗せ、布やわらなどでぐるぐる巻きにして、都や斎宮へ送り届けたものと思われます。小字のヒム口は夏まで氷を保存したその場所だと言われています。

だんだん溶けてしまって残ったわずかな氷。清少納言が平安時代に書いた『枕草子』という本には「あてなるもの（中略）削り氷にあまづら入れて 新しき 金まりに入れたる 水晶の数珠 ……」と「上品なものは削った氷に甘い汁を入れて、新しい金属の椀に入れたもの。水晶の数珠。……」と削った氷を清少納言は、上品な物として一番にあげています。

庶民は絶対に口にすることのない夏の氷は平安貴族たちにとっても大変得難いものでした。



仏足跡碑
なでると 足痛
おさまるよ

鍬形の伊勢本街道沿いに釈迦の足跡が彫られた碑がある。足神さんと呼んで旅の安全や足痛が治るよう祈った。

鍬形の伊勢本街道沿いには仏足跡碑があります。仏足跡というのは釈迦の足の裏の形を石に刻んだものです。仏教がインドで生まれた初めのころ、仏像は造られず、釈迦の足跡や菩提樹の木などを拝んだのです。

釈迦の足裏にはきれいな模様があるといわれていて法輪や塔などの模様が仏足跡には彫られています。

「経に此相を見れば千劫の重罪を滅すと言えり」裏には「天保五年乙巳春　天阿弥陀佛」と刻まれていて伊勢神宮を目指し長い旅を続けてきた旅人は、旅の安全や足痛が治るように祈りました。わらじが破れてしまった旅人は誰かが供えたわらじを貰って履き替えることもあったでしょう。

仏足跡碑のうしろ、山ぎわに庚申さんがまつられており、不動院への坂道が続きます。鍬形の不動院といえば、縁日には櫛田川の対岸からもお参りに来るほどにぎわった所。今はお堂の前の滝も寂しげです。

明治39年（一九〇六）、近くに鍬形発電所が作られました。曲がりくねった櫛田川の上流から水を取り入れ、トンネルを掘って発電所に導きました。レンガ造りの建物も昭和58年（一九八三）に取り壊されました。

平和願う　鎮魂碑建つ　弓部山　重爆撃機　墜落す

昭和20年5月、車川の奥の弓部山に重爆撃機が墜落した。米軍に占領された硫黄島への爆撃から帰還の途中だった。戦後慰霊の碑が建てられた。

文後トンネルが完成し朝柄と車川のあいだを結ぶ町道が開通したのは昭和63年（一九八八）のことです。朝柄から国道368号を南へ折れこの町道を走ります。トンネルから下りの坂道が終わった地点に少し先がとがった黒い石碑が建っています。最上部には飛行帽をかぶった若者の顔が浮き彫りになっており、続く文字は「航空戦士散華之地」とあります。そこから6キロメートル先、遥かに見える弓部山がその地です。

昭和20年（一九四五）5月、車川の奥の弓部山に飛行機が墜落しました。浜松から飛び立ち当時、すでに米軍に占領されていた硫黄島を爆撃して帰る途中の重爆撃機でした。

乗っていた日本陸軍の浜松教導飛行師団の八名はみな死亡しました。

車川の人々は墜落当時から機体の回収に協力し、遺体を荼毘に付すなど手厚く慰霊に努めてきました。平成2年（一九九〇）、遺族・関係者を招き、墜落現場に墓標を建て、翌々年には鎮魂の碑を建て合同慰霊祭を催しました。

記念碑には乗員の名前が彫られていますが、不明だった一人の名も後に判明し刻まれました。

車川の人々は弓部山での慰霊祭を今も続けています。

砲術の技を磨いた土羽の里

紀州藩田丸城主久野純固は幕末、開港を迫る諸外国への海防の重要性を唱えて藩士に砲術を学ばせ、大砲を作り、土羽に練習場を設けた。今練習場跡には純固の碑が建つ。

寛永一六年以来、江戸幕府は鎖国政策をとっていましたが、嘉永六年アメリカのペリーが開国を求めて浦賀の沖に軍艦四隻でくると日本中が大騒ぎになりました。

それ以前にも一八世紀末にはロシア船やイギリス船が日本近海に現れるようになっていましたから、幕府は海防の強化を諸藩に命じ、異国船打払令を文政八年に出していました。

紀州藩領の田丸城城主久野純固は海防の重要性を認識し、藩士を江戸に遣わして最新の西洋砲術を学ばせ、航海術までも学ばせました。そして土羽に砲術練習場を設けて、江戸で造らせた洋式砲の練習をさせました。

練習場はＪＲ参宮線の線路わきに続く林の中にあったのですが、その砲座があったかすかにわかる盛り土の端に「田丸藩砲術練習場跡」という石柱があります。そこに海防の必要性や、そのために火技（砲術）を土羽山で練習することなどを記した安政元年（嘉永七年）の純固の大きな碑も建っています。

そこから線路の下の田んぼを越えて矢田の方に向けて砲弾を発射したといいますが、当時の丸い砲弾の射程距離は短く付近の水田からは的に届かなかった大小の砲弾が出土したそうです。

安政五年、大老井伊直弼が朝廷の許可無く結んだ日米修好通商条約に反対し、尊王攘夷という考えが広がります。明治維新の原動力となった攘夷は外敵を討つこと。皮肉にも明治になると国を開くことになりました。